



KANSAI UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2015

vol. 17

学びをデザインするということ

教育開発支援センター長 田中 俊也

もう15年以上も前のことになるが、関西大学から在外研究の機会を与えていただき、アメリカのピッツバーグにあるカーネギーメロン大学に1年間滞在した。その期間に指導を受けたサイモン先生(Simon, H.A.)は、ノーベル経済学賞を受賞した認知心理学者であり、経済学者であり、コンピュータ科学者でもあった。

“How many Simons?”(サイモンはいったい何人いるの?)という論文が出るほど、さまざまな領域での第一人者であった。そのなかでも、「デザイン学」の領域での第一人者であることはあまり知られていない。

サイモン先生に言わせれば、現在の状態をより好ましいものに変えようとするのはすべてデザイン活動だ、ということになる。すなわち、今の状態をよりいい状態に変えていくという問題解決の本質は、実はデザインをすることなのだ、ということになる。これを、問題解決の心理学の用語で表現すれば、なんとかしなければならぬ初期状態(現在の「問題」状態)

を、好ましいと思われる目標状態に変換すること、そのためにとることのできるさまざまな手段・操作を駆使し、とってはいけない手はぐっと我慢しながら、最終的には目標状態に到達し、それで「解決」したことになる。ここでいう「状態」は、心理・社会的状態(心・気持ちの状態)であったり、物理的環境(物の世界の状態)であったりする。いずれにせよ、その変化が「満足」化された時、それを一定の解決、とみなす。

こうして、問題解決の視点からは、満足化されればそのサイクルは終了したこととなるが、実際のわれわれの生活ではそうではない。一定の満足は、時間や環境の変化に伴ってすぐに不満にみちた問題状況になる。そう考えると、日常生活でのわれわれの、よりよい状態への変化を目指した活動は、こうした、1つのサイクルで完結する問題解決、と捉えるより、もっと長期に渡る変化への志向を示すデザイン活動、と考えるほうがより妥当である。

学習は、与えられた一定の課題を解決すれば完結するが、学びは自らの内に湧き出した問題状態を解決状態に変えていく、絶え間ない主体的な活動である。学びをデザインする、とは、そうしたアクティブな学びを支援する人的・物的・社会的諸環境を整備することである。大学の重要な使命の一部は実はそこにあるのだ、ということが最近になってやっと気づかれ、カリキュラム改革やコモンズの空間の整備等が本気でなされるようになってきた。20年来の主張が現実化されていく、いい流れである。



サイモン先生と(1997年5月)

フォーラム・セミナー報告

COIL(国際遠隔交流学習)に関する 国際シンポジウム&ワークショップを開催

関西大学千里山キャンパスで12月6日、COIL(Collaborative Online International Learning)国際シンポジウムが開催された。COILは、ICTを用いてバーチャルに海外の教育機関のクラスと交流学習を行う教育活動のことである。異文化交流として、共修学習の一環として、そして英語などの外国語を

用いた学習活動をより活性化する手段として、COILは大変有効であり、現在米国だけではなく世界各国にて、特に国際教育の場面において着目されている。本学では、平成26年度にニューヨーク州立大学(SUNY)の2キャンパス、そしてスコットランドにあるGlasgow Caledonian UniversityとのCOIL活動を合計3科目において実施し、さらにこの取組について広く知ってもらうことを目的とし、2014年12月6日にCOIL Center所長のJon Rubin教授を招いて国際シンポジウムを開催した。シンポジウムは国内外合計121名の参加(学内関係者を含む)があり、楠見晴重学長の関西大学の国際化、国際教育カリキュラムの重要性を示唆したオープニングの挨拶を皮切りに、文部科学省からも国際企画専門官の佐藤邦明氏の講演があり、国家



2014年12月6日尚文館AVメディアホールにて



2014年12月7日関西大学新北棟にて

施策としての学生モビリティの推奨運動とCOILの関係性についてご見解をご提示いただいた。午後のパネルセッションでは、先述の3科目でのCOIL実践の報告をSUNYからシンポジウムに参加いただいた3名の教職員と関西大学側の担当者らが行った。報告の最後には、アメリカからこのイベントのために来日した2名のSUNYの学生と、COILを通じて良き友となった本学の学生達(日本人学生3名、交換留学生3名)が登場し、実際の「参加者の声」として英語で感想を述べるといった場面も設けられた。COIL実践報告の他にも、学習管理システム(LMS)や台湾およびドバイから招へいたした研究者らによる各国の教育・テクノロジー事情に関する発表もあり、盛りだくさんのプログラムとなった。12月7日には、学内10名、本学の協定大学である又

松大学(韓国)、正修科技大学(台湾)、そしてCOIL発祥の地であるニューヨーク州立大学などから10名が参加し、半日のワークショップにて海外大学との交流学習を「単なる社交的な交流」に終わらせない教育活動の計画の仕方、指導の与え方、学生の活動の評価の仕方など、実践で役立つノウハウをCOIL Centerの所長とSUNYのインストラクショナルデザイナーから伝授いただいた。このワークショップの参加者らとのCOILが平成27年度に予定されている。今後COILは「KU-COIL」として学内の多様な科目において実施されることになっており、このシンポジウムを契機に、さらに多くの海外大学とのCOILを通じたパートナーシップが成立することが期待されている。

(国際部 池田佳子)

FDフォーラム

大学教育再生加速プログラム採択記念シンポジウムを開催しました

2月21日、「関西大学第12回FDフォーラム/大学教育再生加速プログラム採択記念シンポジウム」を開催しました。

午前は、シンポジウム、午後は参加者参加型のワークショップをおこないました。シンポジウムでは、『21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>を育成するために ~未来を切り開く交渉学~』というテーマで、交渉学の研究分野で第一人者である、東京富士大学経営学部経営学科教授、隅田浩司氏より、「交渉学への誘い-交渉学の展開とグローバル人材育成における交渉学教育」についてご講演いただきまし

た。さらに、金沢工業大学大学院知的創造システム専攻 客員教授、一色正彦氏より、「交渉学教育の実践例-日本向け教育プログラム開発と大学・企業の実践例」と題して

ご講演いただきました。

午後は、『交渉学ワークショップ:社会人と学生の交流ワーク』を学生と社会人が混合グループとなり、全員参加型のロールシミュ



隅田先生講演の様子

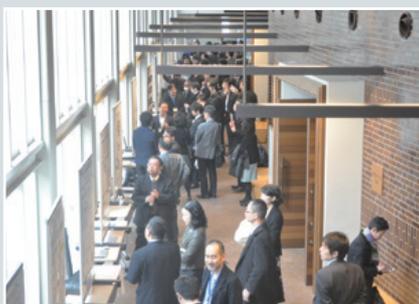
日時：2月21日(土) 10:00 ~ 12:30 / 13:30 ~ 18:00
場所：第2学舎2号館C303教室 / 第2学舎2号館C304教室

シンポジウム 「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」 を開催しました。

日時：2月24日(火) 13:30～19:00
場所：第2学舎4号館BIGホール100

2月24日(火)に千里山キャンパスで、シンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」を開催しました。このシンポジウムは、文部科学省の平成26年度「大学教育再生加速プログラム」に、本学が申請した「21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>の育成」事業が選定されたことを受け、取り組みの一環として行われたものです。特に今回、アクティブラーニングのみならず、ディープ・アクティブラーニングと題したのは、本学が今後取り組むアクティブラーニングが単なる活発な学習活動にとどまらず、より深い思考や理解を伴うアクティブラーニングを目指していることがその理由となっています。

シンポジウム第1部は、反転学習の実践者および研究者21組が日ごろの成果をポス



ポスターセッションの様子

ター形式にして発表し、参加者と熱く議論を行うポスターセッションから始まり、「ディープ・アクティブラーニング」をテーマに、東京大学大学院情報学環学際情報学府の山内祐平教授からは高次育成能力のあり方について、また京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一氏からはアクティブラーニングとトランジションをテーマにご講演いただきました。そして第2部では、基調講演として東京大学の吉見俊哉副学長兼大学総合教育研究センター長にご登壇いただき、反転学習へのMOOCの活用をはじめ、自身の反転授業実践事例などを紹介いただき、未来の大学教育のあり方やその方向性についてお考えを伺いました。

第3部のパネルディスカッションでは、本学の青田浩幸学長補佐も加わり、反転学習で大学教育がどのように変化するかをメインに、終始白熱した議論が繰り広げられ、約200人の参加者は、これからの反転学習やアクティブラーニングについて知見を深めました。

事後アンケートの結果、90%以上の参加者が「参考になった」と回答し、「ポスターセッションが大変参考になった」や「アクティブラーニング



パネルディスカッションの様子

と反転学習の関係性、その組み合わせの困難な点の話はこれまでの認識を整理できてスッキリした」「新しい観点を得られた」などの意見が多く寄せられました。

(教育推進部 森朋子)



講演の様子

レーション形式で模擬交渉を体験学習しました。参加者の皆さんは、2つの交渉ケースを経験し、初めての模擬交渉に楽しみながら取り組んでいました。

参加者は総勢、午前、109名、午後、115名でした。午前の内訳は、社会人(55名)、学生(19名(本学学生12名、他学学生7名))、社会人TA(18名)、本学教職員(17名)

でした。午後の内訳は、社会人(42名)、学生(38名(本学学生24名、他学学生14名))、社会人TA(18名)、本学教職員(17名)でした。AP取得後、初めての交渉学のシンポジウム・ワークショップでしたが、100名を超える熱心な参加者に恵まれました。

(教育推進部 山本敏幸)



ワークショップの様子



一色先生講演の様子



交渉の準備グループワークの様子

交渉学ワークショップの開催

日時：2014年12月12・13日 場所：熊本学園大学

2014年12月12日・13日の両日に亘り、熊本学園大学にて関西大学教育推進部の三浦真琴教授・山本敏幸教授・田上正範研究員ならびにLA(ラーニング・アシスタント)の学生が「熊本学園大学リーガルエコノミクス学科秋季講座:交渉学~社会人と学生の交渉型ワークショップ」に参加しました。

このワークショップは、社会人と共に交渉学ならびにクリティカルシンキングをいくつかのケースに基づいて模擬的に体験することによって「考動力」を形成することを目的とした取り組みです。参加した両大学の学生と社会人(総計約50名)は複数のグループに分かれ、提示された課題に関するダイアログやディスカッションを経た上で意思決定とそのプレゼンテーションをそれぞれのグループにて実施しました。関西大学のLAは、プログラムの進

行ならびにファシリテーションを担当し、あるいはコンテキストの解釈や可視化のモデル・プレゼンテーションを提示し、交渉学ワークショップにおいて学生のリーダーとして発揮すべきスキルを学び、あるいはそれを提供するミッションを遂行しました。

このワークショップに参加した社会人からは、「学生さんが真剣に取り組む姿に好感を持ちました」「こんなに意識の高い大学生がいるのに驚きました」「授業の内容を可視化するスキルを身につけたいと感じました」などの好評価(高評価)を頂きました。

交渉学ワークショップは既に関西大学を会場として過去に三度開催していますが、今回はフランチを離れての初めての経験となりました。アウェイであっても、LAの学生たちは、その持てる力を存分に発揮することができるとい、嬉しく、意味

のある発見と確認がなされた研修でした。

なお、このワークショップは毎日新聞に掲載されました(以下参照)。

(教育推進部 三浦真琴)



寸劇で卒業旅行について相談する学生ら=関西大提供

毎日新聞大学支援センター監修

文科省補助制度、教育再生加速プログラム 主体的学び引き出す

2015年2月16日

大学の教育力を伸ばすため、文部科学省の肝煎りで今年度から始まった補助制度「大学教育再生加速プログラム(AP)」。社会人に必要な能力を育成する主体的な学習方法「アクティブ・ラーニング」や学習効果の「見える化」に採択件数の8割超が集まっており、大学改革の一つの方向性を示している。大学の講義を変える新たな学びのスタイルとはどのようなものか。

◇グループで解決策探る—関西大

「親に納得してもらって、みんなで行くにはどうすればいいか」。昨年12月13日、熊本市にある熊本学園大学の教室で、同大と関西大(大阪府吹田市)の学生が壇上で寸劇を披露した。

大学4年生6人が卒業旅行を企画する内容で、行きたい場所や予算、期間、親の反対といった状況を整理して、解決策を探る。関西大4年、山本綾香さん(22)が、父親役の三浦真琴・同大教授(教育開発支援センター)から日程を

理由に旅行を反対され「お父さんの分からず屋」と反発する場面では、教室がどっと沸いた。

この日は、学生と社会人合わせて40人以上が混成チームを作り、4時間半かけていくつかのテーマについて解決策を話し合った。寸劇で取り上げた卒業旅行の計画をめぐる話し合いもテーマの一つ。山本さんらLA(学習支援者)を務める関西大生4人と熊本学園大の学生4人が中心となって企画、進行も担当した。

関西大は、課題をグループで解決するPBL(課題解決型学習)や学生参画型の授業を取り入れ、生涯を通じて創造的に活躍できる人材育成を掲げてAPに採択された。三浦教授が担当で、主体となって活動するのは、LAを務める学生たちだ。

山本さんのように、国際学会を含め他大学での「他流試合」でLAを務める学生は10人に上る。関西大は21日、千里山キャンパスでフォーラム「21世紀を生き抜く考動力を育成するために」を開催。APでの成果などを報告する予定だ。問い合

わせは同大教育開発支援センター(06・6368・0230)。



From CTL事務局

平成24年度に文部科学省大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」が採択された。この取り組みは、関西大学と津田塾大学で展開するライティングセンターの支援体制整備を中心に、多彩な連携事業を展開している。

これまでの期間、大学院生のTAによる個別相談や、ライティング能力を総合的に向上させる企画を開催してきた。

昼休みの時間帯に開講しているレポートの書き方を解説する「ワンポイント講座」では、「なぜレポートを書かなくてはならないのか?」といったテ

マから始まり、書くうえでの留意点やここでしか聞けない文章力向上のテクニックなど、細かなアドバイスを受けることができる。

参加者は採択初年度の約6倍(出張ワンポイント講座を含む)になり、関心を持った学生が増えたことは、取り組み担当者として非常に喜ばしいことである。それと同時に、本講座の開講を知らない学生が未だ多数存在するという現状を知り、新たな課題も見えてきた。

「関心」という点では、他大学からの視察やメディア取材が増えた点が挙げられる。視察者からは、「今の学生は、整備・充実した施設を自由に活用できて羨ましい」という声が聞こえてくる。

限られた学生生活のなか、卒業してから「利用(参加)すれば良かった」と後悔しないよう、施設を十分に活用し、新たな企画にはぜひとも自発的な姿勢で参加してほしいと願う。

今年の4月からは、千里山キャンパス第1学舎1号館5階、高槻キャンパスC棟1階に加え、総合図書館内でも個別相談を受けられるようになる。

このコラムを読んだ学生の中で、一人でも多くの方が、自らの意思で「考動」し、ライティング関連の企画に参加してくれたらと希望を膨らませている。取り組みを成功させるためには、我々運営側スタッフの力だけではなく、学生諸君の積極的な姿勢が鍵を握っている。(将)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2015年3月25日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター